

第1章 事業の概要

1 事業の目的

本事業は、平成 17 年度に実施された「沖縄県体験滞在交流促進事業（地域貢献・交流事業）座間味村美ら島づくり」の後継事業と位置づけられる。平成 17 年度は、美ら海づくりツアーおよびふれあいの森づくりツアーを合計 4 回実施し、延べ 116 名の参加者を得た。今年度は平成 17 年度で培ったノウハウや改善点を基に、美ら海づくりツアー3回・ふれあいの森づくりツアー3回の合計 6 回を実施することとし、以下の 5 点を事業の目的とした。

座間味村の豊かな自然環境と人材を基軸とした、自然の保全と利用、人材を活用した村づくりを展開する。

とりわけ、平成 17 年度事業に関わった多くの村民、および平成 15 年度～平成 16 年度に実施した「体験滞在交流促進事業」の人材育成事業の修了生に対して、昨年度の反省を踏まえた新たな実践と活動の場を提供する。

村外からのボランティア（ツアー参加者）が、座間味の自然を守り育む活動と村民との交流を通して、座間味村のリピーターかつサポーターとして定着することを図る。

～ の相乗効果として、村民とツアー参加者が協力し合いながら村づくりに携わることで、地域の活性化を実現し、内外に座間味村を広く PR する機会を創出する。

本事業の企画・運営は、村民が中心となって創り上げることとし、座間味村の将来像や方向性を、村民自らが主体的に描くきっかけとする。

2 事業の概要

上記の目的を達成するべく、「美ら海づくり事業」と「ふれあいの森づくり事業」の 2 つの事業を展開することとし、それぞれ 1 泊 2 日の「美ら海づくりツアー」「ふれあいの森づくりツアー」を実施した。

美ら海づくり事業（美ら海づくりツアー）

座間味村・渡嘉敷村から成る慶良間諸島は世界有数のサンゴ礁域であり、2005 年 11 月にはラムサール条約（特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約）に登録にされた。しかし、この貴重なサンゴ群が、近年オニヒトデやシロレイシガイダマシの異常発生や白化現象・ホワイトシンドローム等によって大きなダメージを受けている。

本事業では、サンゴの保全活動を精力的に続けている地元ダイビング協会と連携を図り、参加者に座間味海域のサンゴの現状を知る機会を提供すると共に、サンゴの保全活動を展開することを主目的とした。

この他、ビーチクリーン活動・シーカヤック/ヨット体験といった座間味の海を楽しむ活動を盛り込み、座間味の美ら海を保全・維持しながら総合的な魅力を体験することを目指した。

ふれあいの森づくり事業（ふれあいの森づくりツアー）

座間味村はダムの利水容量が増加する水需に比べて絶対的に少ないこともあり、慢性的な水不足の問題を抱えている。また村民の生活様式の変化に伴い、自然と人間・人間と人間とのふれあいの場として村内の森林が利活用される機会も減ってきている。

本事業では、参加者および村民に対して果樹（シークワサー）を植栽する機会を提供し、里山の本来の機能回復と新たな活用を図った。参加者には自ら制作したオリジナルの看板を設置してもらうことで、自分が植えるシークワサーへの愛着を高め、シークワサーが実をつける時期に収穫のために再び島を訪れる契機とした。

この他、村民の指導による染め物体験・陶芸体験などを盛り込み、海だけではない座間味の魅力が広く認知されることを目指した。

また、両事業に共通して、村民の手作りによる郷土料理や、村民による伝統芸能の鑑賞・体験の場を設け、参加者が村民と活発に交流できる場を演出した。

なお、本事業の対象は以下のとおりである。

座間味村あるいは環境保全活動や交流活動に関心を持つ、村外在住者

平成 15 年度および平成 16 年度「体験滞在交流促進事業」の人材育成事業の受講生

平成 17 年度「美ら海づくりツアー」および「ふれあいの森づくりツアー」の関係者

環境保全活動あるいは交流活動、伝統文化の保持に関わる、座間味村在住者

3 実施体制

座間味村には座間味島・阿嘉島・慶留間島の 3 つの有人島が存在している。本事業の目的を鑑みると、この 3 つの島全てにおいてツアーを実施すべきであり、また参加者の移動の利便性を考慮すると、1 泊 2 日のツアーでは、複数の島を移動することなく、それぞれの島内で完結することが望ましい。

しかしながら、宿泊できる民宿等の数量や収容可能人数、さらにはプログラムの実施体制といった観点から、慶留間島での催行は難しいと判断せざるを得なかった。また同様の理由から、座間味島と阿嘉島で 3 回ずつツアーを実施するよりも、村民の数が多いう座間味島での割合を多くしたほうが良いとの結論に達し、阿嘉島において「美ら海づくりツアー」と「ふれあいの森づくりツアー」を 1 回ずつ実施し、座間味島においてそれぞれ 2 回ずつ実施することとした。

また、宿泊に関しては、できるだけ多くの村民が本事業に関わり、また参加者も 1 人でも多くの村民と交流を持って欲しいとの思いから、参加者をグループ毎に分け、村内の複数の民宿に分泊するスタイルを採用した。